シリーズ 「薩摩焼」（全10回）

常設展示3階美術・工芸部門

No.2 白薩摩―原料「陶土」

白薩摩の原料は、南薩産！

三つの皿にそれぞれ白い塊がのっています。実は、これらが白薩摩の素地（きじ）をつくるための原料！
一見すると、どれも同じにみえるかもしれません。
でも、それぞれに異なる個性をもっていて、どれも欠かすことができません！

よ～く見比べるとちょっとちがう気がするけど難しい！ どこがちがうの？

お答えしましょう！

左は、「笠沙陶石（かささとうせき）」。現在の南さつま市笠沙町で採れるから、このネーミング！
陶石は、長石（ちょうせき）や石英（せきえい）といった鉱物をたくさん含んでいる、焼物づくりの大切な材料です。

真ん中と右は、どちらも指宿（いぶすき）市で採れる「指宿白土（はくど）」。でも、ちょっと中身が違います。
よく見ると、真ん中より右側のほうがざらざらして粗い感じがしませんか？

指宿白土は、「カオリン(カオリナイト)」と呼ばれる粘土で、粒がとても細かく粘りの強い、ねばねばした「ネバ」と、岩石に近い形を残していて、ばらばらした「バラ」の２種類があります。
ということは、真ん中が「ネバ」で、右が「バラ」ってこと！
粘りが強い「ネバ」は、いろんな形をつくるのに適しているけど、柔軟な分だけへたりやすい！
一方、岩石に近い「バラ」は、硬いから変形しにくいけど、形を保つのには向いています。

この三種の原料を絶妙のバランスで調合して、白薩摩に適した粘土をつくります。
だから、大きいものと小さいものをつくるときは、それぞれ調合を変える工夫もしています。

笠沙も指宿も薩摩半島の南部だね！？

そう！ 白薩摩の原料は、採れる場所が限られているのです。
みなさんは指宿というと、何を思い浮かべますか？ “温泉”って答えた人は大正解！
実はこれらの原料は、硬い岩石が温泉のお湯などの影響を受けて白く変化したものなのです。

ということは、温泉がなかったら白薩摩の原料は採れなかったってこと！？
そう、火山の恵みなのです。でも、採れる場所が限られるってことは、その分だけ希少で高価だってこと。だから、用いることができる人が藩主やその周辺に限られた御用品になったんだね！

次回は素地用の粘土のつくり方に注目します。お楽しみに！！

学芸員 深港